

詩篇 132 篇

都上りの歌。ダビデによる

A. 父祖ダビデのための祈り

a. ダビデの誓い

- 1 主よ。ダビデのために、彼のすべての苦しみを思い出してください。
- 2 彼は主に誓い、ヤコブの全能者に誓いを立てました。
- 3 「私は決して、わが家の天幕に入りません。私のために備えられた寝床にも上がりません。
- 4 私の目に眠りを与えません。私のまぶたにまどろみをも。
- 5 私が主のために、一つの場所を見だし、ヤコブの全能者のために、御住まいを見いだすまでは。」

b. エルサレムへの行進

- 6 今や、私たちはエフラテでそれを聞き、ヤアルの野で、それを見いだした。
- 7 さあ、主の住まいに行き、主の足台のもとにひれ伏そう。
- 8 主よ。立ち上がってください。あなたの安息の場所に、お入りください。あなたと、あなたの御力の箱も。
- 9 あなたの祭司たちは、義を身にまとい、あなたの聖徒たちは、喜び歌いますように。
- 10 あなたのしもべダビデのために、あなたに油そそがれた者の顔を、うしろへ向けないでください。

B. 主からの答え

a. 主の約束

- 11 主はダビデに誓われた。それは、主が取り消すことのない真理である。「あなたの身から出る子をあなたの位に着かせよう。
- 12 もし、あなたの子らが、わたしの契約と、わたしの教えるさとしを守るなら、彼らの子らもまた、とこしえにあなたの位に着くであろう。」

b. シオンに住まわれる主

- 13 主はシオンを選び、それをご自分の住みかとして望まれた。
- 14 「これはとこしえに、わたしの安息の場所、ここにわたしは住もう。わたしがそれを望んだから。
- 15 わたしは豊かにシオンの食物を祝福し、その貧しい者をパンで満ち足らせよう。
- 16 その祭司らに救いを着せよう。その聖徒らは大いに喜び歌おう。
- 17 そこにわたしはダビデのために、一つの角を生えさせよう。わたしは、わたしに油そそがれた者のために、一つのともしびを備えている。
- 18 わたしは彼の敵に恥を着せる。しかし、彼の上には、彼の冠が光り輝くであろう。

120 篇：カナンの地の外に住む者の歌

121 篇：巡礼の旅の歌

122 篇：エルサレム神殿到着の歌

123-133 篇：祭で歌われる祈り

134 篇：帰路に着く者への祝福の祈り

本篇が書かれた時代は捕囚からの解放後であると考えられていますが、父祖ダビデを回顧する内容になっています。後代の詩人がダビデについて書かれた聖書の記事を読みつつ、彼の気持ちになって書き綴っているのでしょう。ここには「ダビデ契約」と呼ばれるⅡサムエル7章の内容が背景にあり、そこでダビデは主のために神殿を建てる構想を描いています。

王が自分の家に住み、主が周囲のすべての敵から守って、彼に安息を与えられたとき、王は預言者ナタンに言った。「ご覧ください。この私が杉材の家に住んでいるのに、神の箱は天幕の中にとどまっています。(Ⅱサムエル7:1-2)

このストーリーを念頭に置いて本篇を読み解いてまいりましょう。

A. 父祖ダビデのための祈り

a. ダビデの誓い（1～5節）

「彼のすべての苦しみ」（1節）とは、神殿を建立しその聖所に神の箱を安置したいという悲願が達成できなかったダビデの残念を指していると思われます。3～4節では立て続けに「わが家の天幕に入りません」「寝床にも上がりません」「私の目に眠りを与えません」という強い決意が表明されていますが、それは「ヤコブの全能者のために、御住まいを見いだすまでは」（5節）という神殿建立への並々ならぬ思いの表れです。しかし、その誓いはダビデによってではなく、息子ソロモンによって果たされたのでした。

ある時、私に次のような主のことばがあった。『あなたは多くの血を流し、大きな戦いをしてきた。あなたはわたしの名のために家を建ててはならない。あなたは、わたしの前に多くの血を地に流してきたからである。見よ。あなたにひとりの子が生まれる。彼は穏やかな人になり、わたしは、彼に安息を与えて、回りのすべての敵に煩わされないようにする。彼の名がソロモンと呼ばれるのはそのためである。彼の世に、わたしはイスラエルに平和と平穩を与えよう。彼がわたしの名のために家を建てる。彼はわたしにとって子となり、わたしは彼にとって父となる。わたしはイスラエルの上に彼の王座をとこしえまでも堅く立てる。』（Ⅰ歴代22:8-10）

b. エルサレムへの行進（6～10節）

ダビデが王となった時代、神の箱はサウル王の時代にペリシテ人の地アシュドデに持ち去られて（Ⅰサムエル5:1-2）から ^{たらい} 盥回しにされ（ガド→エクロン→ベテ・シメシュ→キルヤテ・エア

リム)、アビナダブの家に二十年に亘って置かれていました (I サムエル7:1-2)。

「エフラテ」(6節)とはベツレヘム周辺の地域、「ヤアル」(6節)とは「神の箱」が安置されていたキルヤテ・エアリムを指すと思われます。「ヤアル」には「森林」「茂み」という意味もあり、神の箱が森の中に捨て置かれていたようなイメージさえ抱かせます。その箱を見つけ出しエルサレムへ持ち帰ろうというダビデの気概が、「**あなたの安息の場所に、お入りください。あなたと、あなたの御力の箱も**」(8節)ということばで表されています。

しかし、ダビデは契約の箱の運び方を知りませんでした。その箱を「新しい車」に乗せて運んでいたとき、それがひっくり返りそうになったのでウザが手で押さえようとした刹那、神の逆鱗にふれてウザは死にました。契約の箱は本来、レビ人(祭司)にしか触れることが許されていなかったのです(レビ16:2、民数4:15,20、申命10:8)。「**あなたの祭司たちは、義を身にまとい、あなたの聖徒たちは、喜び歌いますように**」と言われている背後には、この出来事があるのではないのでしょうか。

B. 主からの答え

a. 主の約束 (11~12節)

11節以下では、ダビデ家が永続することが主の約束として語られていますが、同時にダビデの子孫としてメシアがお生まれになることも暗示されています。この箇所の前になっているIIサムエル7章の記事を見ておきましょう。

あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって子となる。もし彼が罪を犯すときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。《中略》あなたの家とあなたの王国とは、わたしの前にとこしえまでも続き、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。(IIサムエル7:12-16)

b. シオンに住まわれる主

本篇は、とりわけ最後の部分において「メシア詩篇」としての輝きを増し加えます。

そこにわたしはダビデのために、一つの角を生えさせよう。わたしは、わたしに油そそがれた者のために、一つのともしびを備えている。わたしは彼の敵に恥を着せる。しかし、彼の上には、彼の冠が光り輝くであろう。(17-18節)

「角」「ともしび」「冠」という三つの用語は、力と輝きと王の威厳を表しています。ダビデの家系からやがてお生まれになるまことの王、永遠の神の国を確立するメシアの到来がここに預言されています。実際の歴史を見ると、ダビデに続くユダの家系も新バビロニア帝国によって滅ぼされました。それではこの預言は成就しなかったのでしょうか。いいえ、主イエスは霊的な神の国の王として確かにユダの家系からお生まれになったのです。

順序が逆になりましたが、13-16節の内容にふれて終わります。ここでは、主の住まいとして「シオン」が選ばれ（13節）、それが「**とこしえに、わたしの安息の場所**」（14節）とまで呼ばれています。シオンは歴史的に見ても特別な地とされ、メシアが来られる場所だと信じられてきました。シオンは霊的意味合いの強い地ではありますが、19世紀以来世界に拡大している「シオニズム運動」と混同すべきではないでしょう¹。シオンは今や、心に聖霊を宿すすべての人の内にあるのです。主イエスは、神の箱（神の臨在の象徴）がエルサレムに入るが如く、聖霊によって信者の内に宿り、インマヌエルを実現してくださいました。そして、その人の内で拡大する「神の国」は、キリストが永遠に統治される「神の国」とつながっているのです。「**わたしは豊かにシオンの食物を祝福し、その貧しい者をパンで満ち足らせよう**」（15節）という約束は、そこで与えられるとこしえの平安を語っているでしょう。このように、ダビデに対して語られた主の約束は、その子孫としてお生まれになったキリストによって成就されたのでした。

¹ 最初にシオニズムを唱えた人物は、ツヴィ・ヒルシュ・カリシャー（1795-1874）という人物で、彼は「（正統派ユダヤ教のように）救世主メシアを待つのではなく、積極的にパレスチナへの移住（シオンへの帰還）を実現すべきだ」「救世主が地上に出現することはない」と主張していた。カリシャーは、欧州のゲッターなどに居住するユダヤ人（アシュケナージまたはハザール系ユダヤ人）の一人で、ロスチャイルド家との交流が深く、1836年にフランクフルトの二代目アムシェル・マイヤー・ロスチャイルド宛に書簡を書き送り、「エルサレムの地を時のオスマン帝国の君主バフムト二世から買い取ること」を提案した。1917年11月2日の「バルフォア宣言」では、イギリスの外務大臣アーサー・バルフォアが、ライオネル・ウォルター・ロスチャイルド（1868-1937）に書簡を送り、「国王陛下の政府は、パレスチナにおいてユダヤ人のための民族的郷土ナショナルホームを設立することを好ましいと考えており、この目的の達成を円滑にするために最善の努力を行うつもりです」と、イギリス政府がシオニズム運動を支持することを宣言した。この宣言はウォルターによってアメリカシオニスト機構に伝達された。1948年のイスラエル建国の背後には上記のような流れがあり、現在のイスラエル最高裁判所はロスチャイルドの寄付によって建設されている。

（「バルフォア宣言」については、林千勝『ザ・ロスチャイルド』経営科学出版、2022 p. 278-283参照）